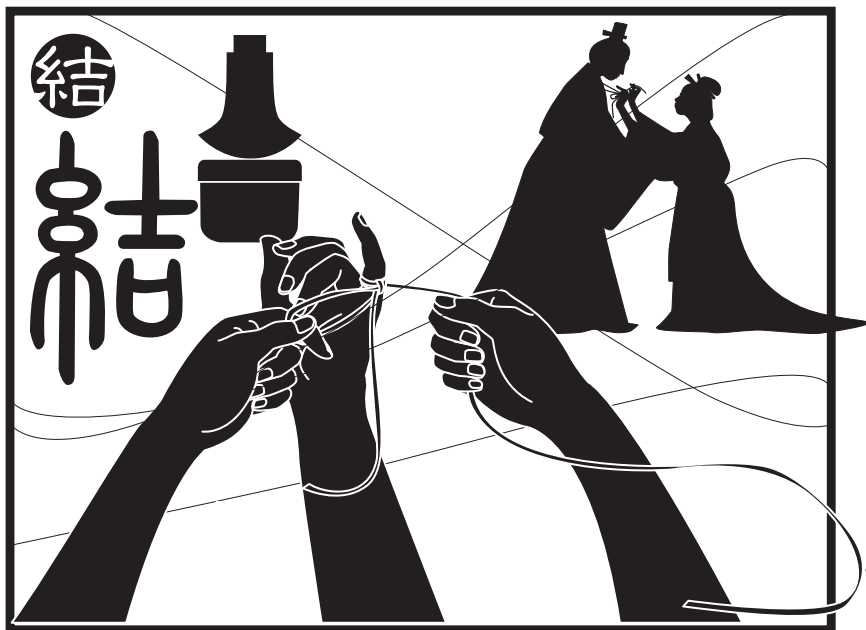


白川静のことば

《16》



金子都美絵・画

物に生命としての象徴を認めるように、人の行為もまたそのような象徴性をもつ。たとえば「紐を結ぶ」という行為は、そこに霊的なものを結びこめる行為とみられるのである。紐は「系なり」とあり、丑声とするが、丑は指に力を入れた手の形で、強く締める意である。男女の愛情を約する組み紐に「結不解」というのがあった。結も形声とされる字であるが、吉は祝告を戌形の聖器で封じこめ、詰めること、結は結びこめることである。　　〈中略〉

「万葉」の男女は、相約するとき紐を結び、しばらく別れるときにも紐を結んで、また会うときまで解くことがなかった。もし次の機会までに紐の緒がとけることがあれば、何か不吉なことのきざしとしておそれたのである。

わが妹子がしぬびにせよと著けし紐糸になるとも吾は解かじとよ
〔万葉〕二十四四〇五
 難波路をゆきて来までと吾妹子が著けし紐が緒絶えにけるか也
〔万葉〕二十四四〇四
 などは、みな防人たちの歌うところである。

『漢字の世界』 平凡社ライブラリー

p267～269)

